

須賀川市市民交流センター準備企画

# すかがわ、 めぐるめぐ

春

2016  
創刊号





# はじめに

「須賀川市市民交流センター」のオープンに向け、一人でも多くの方に関心を持ってもらい、利用していただくため、本冊子「すかがわ、めぐるめぐ」を創刊しました。

本施設が交流の場として役立つには、実際に暮らしの中で使われることが大切です。

建物には大きな力があります。

建物の構造や機能によって

人々の予想もしていなかった動き、考えもなかった思考、

気がついていなかった景色に

出会えることもあります。

一方人々の暮らしや活動が建物を

形作っていくこともあります。

何を建てるかとともに、どう暮らしたいか？

そんな問いかけが今も続いています。

ひとつひとつが、いずれ縦へ横へと

繋がっていく場所を目指して。



◎もくじ  
はじめに 02

須賀川市市民交流センターについて 03

一緒につくる、考えるワークショップ2015レポート 04

いま、出会う風景 07

会いたいひとに会いにゆく 08

第一回 酒井ゆうじさん(原型師) 10

すかがわの味 第一回 渡辺果樹園 10

わたしの図書館カード 01 12

飯田良子さん(須賀川市図書館館長) 12

あなたへの一曲 01 13

DJ孔明 aka EXTRIBESTERさん 13

須賀川のデザインを探す① 14

CCGA 現代グラフィックアートセンター 14

編集後記 15

POINT OF VIEW 定点からの記録 16

◎表紙  
須賀川シニアリーダーズクラブのみなさん  
地域やひとのために貢献できる活動を目的として市内の高校生で構成されているシニアリーダーズクラブ。毎月2〜3回定例会を行っており、部員は23名。年齢や学校は様々だけどみんな仲良し。撮影は建設工事前の交流センター予定地で。

## 「人を結び、まちをつなぎ、情報を発信する場の創造」

### 須賀川市市民交流センターについて

須賀川市の中心市街地のメイン通りである通称松明通りに面した建設予定地には、以前、明治38年創業の百貨店「赤トリ巾ショッピングデパート」が店舗を構え、多くの人が行き交い、食材や商品、情報が集まる場所として長年親しまれていました。その後、空き店舗となったデパートを市が総合福祉センターとして改修し、市民交流の拠点として市街地中心部の賑わい創出に大きな役割を果たしてきました。

市民交流センターは、東日本大震災で甚大な被害を受けた中心市街地の再生、活性化のため、震災によって使用不能となり取り壊された総合福祉センターに代わる新たな施設として整備するものであり、「市民文化復興のシンボル」、また「中心市街地活性化の中核施設」としての役割を担うものです。

本施設は、「人を結び、まちをつなぎ、情報を発信する場の創造」を基本コンセプトとした、図書館や公民館などの生涯学習機能をはじめ、子育て支援、市民活動団体等支援、市民交流、賑わい創出など、多くの機能を有する複合施設であり、様々な世代、立場、目的を持った人々が集い、交流し、活動することによって、まちなかに賑わいと活気が生まれ、その活力が市全体に波及していくことを期待しており、中心市街地のみならず「地方創生」、「地域活性化」の拠点となることを目指しています。

※詳しくは、市ホームページ及び専用ホームページ「声のパレット」をご覧ください。



コルピシェフの調理アシスタントとして、市内のイタリアン「フェッラゴースト」シェフの岩崎里美さん、食のユニット「名もないカフェ」の伊藤麻家さん、齋田幹子さんが厨房に入り準備を手伝ってくれました。

各グループで出てきたフェス名称は「すかがわロック 無限」「かっぱっばフェス」「Hi(火)-SUKA」「SHAKA ROCK」「Fire Music Festival! ~世代をつなぐ音楽の火~」。

## 一緒につくる、考えるワークショップ2015 「かえりたくなる街のつくり方」レポート

須賀川市民交流センターがもつ機能や開館後の利用方法について具体的に想像を膨らませ、そこでどんなことができるのか、平成27年度は全3回にわたって、「音楽」「食」「場づくり」におけるプロフェッショナルなゲストを迎えて市民のみなさんと一緒に企画を立て、考えていくワークショップを開催しました。

### 第一回目 「たとえば、音楽フェスをつくる」

◎参考とする施設機能…たいまつホール(1F)  
あきない通り(1F) 音楽ルーム(4F)他

宮城県の塩竈市で2012年から毎年秋に開催されている「GAMA ROCK FES」の立ち上げメンバー、塩竈市出身の写真家平間至さん、Dragon AshダンサーのATSUSHIさん、塩竈市役所の阿部徳和さん、小島蒲鉾店の高橋英良さんをゲストにお迎えし、前半はゲストのクロストーク。ゼロからフェスを立ち上げる大変さと楽しさ、そして継続していくための情熱。被災地支援という想いはもちろん、続けていく

なかで見えてきた地元の魅力や人の温かさ、やさしさと行動力にささえられてきたという実際の体験談はとてもリアルです。後半はグループディスカッション。お題となった「オリジナルフェス」に、きゅうりや桃、カツパ、くまたばん、松明あかしを見立てたキャンドル、ウルトラマンといった案がたくさん出て、音楽フェスを企画することで須賀川の自慢できる強みを再発見することもできました。

### 第二回目 「たとえば、地元食材をつかった料理教室」

◎参考とする施設機能…あきない通り(1F) クッキングスタジオ(3F)  
各階のテラス(2F) 5F)他

ゲストは、被災地での炊き出しや支援物資の輸送・配布、被災地産食材のプロモーションなど震災後も継続して東北の支援活動を行っているフレンチのシェフ、ドミニク・コルピさん。市内の農家さんを視察した際は積極的に食材に触れていきます。圃場で食べた味にインスピレーションが沸きメニューが完成した一汁一菜のレシピ実演では、見慣れた地元食材が彩りの美しい一

皿に変身。会場からは歓声が上がりました。料理するだけでなく学び合える場づくりの可能性を探る、ワークショップクッキングスタジオの活用から「須賀川も芭蕉も味わう会」や、生産者とシェフがコラボする「斬新な郷土料理の料理教室」、日常料理を学ぶ「見直そう！ 須賀川の食材」、栽培から農家訪問までを行う「おいしい学校」案など様々なアイデアが飛び出しました。

### 第三回目 「みんなだ、場づくり」を考えよう」

◎参考とする施設機能…あきない通り(1F) チャレンジショップ(1F)他

「場づくり」のヒントは、かけ算によって生まれるコラボレーション。全国各地で「場づくり」を通してコミュニティ拠点を一つ一つつづってきたグッドモーニングス株式会社の代表水代優さんはエネルギーで元気！会場は一気に彼の勢いに魅了されました。また須賀川の魅力と掛け合わせるコラボレーション先を探すワークショップでは伝統の

お菓子を新しくする「くまたばんだアイス」案や、靴メーカーとコラボしてオリジナルシューズをつくり街の魅力体験を提案する「Walking station」、健康を促すメーカーと組んで健康都市を目指す「宇宙最強の地方都市須賀川でやる宇宙一健康な運動会」、教育機関と組む「After School」案などユニークなコラボ企画案が発表されました。



「考えているだけではだめ。失敗したことはノウハウとなって蓄積されていくので、小さいことでも、まず一歩動き出す事が大切。成功体験があらゆる壁を扉へ変えてくれます！」とゲストの水代さんから熱いアドバイスをもらっ

福島牛のローストビーフとベビーリーフ、ラディッシュ、西洋ほうずきは橋本文男さん、ミニキュウリは常松義憲さん、茄子は佐藤健一さん、梨は渡辺果樹園さんのもの。蜂蜜とわさびの黄色いマスタードソースを添えて。

ワークショップの最中に駆けつけてくれた須賀川市長 橋本克也氏。会場の活気に触れていただきました。



## 松明あかし

須賀川市立第一小学校

落合遥己くん



メッシーも  
好きです。

暗闇に3本の大きな松明が勢いよく天に向かって燃えあがる。ぼちぼちと松明を燃やす音がいまにも聞こえてきそう。手前に描かれた点の集まりは、その光景を眺める沢山の人の姿。松明あかしは、日本三大火祭りのひとつで、420年続く須賀川の伝統行事。クラスの友だちから「はるちゃん」と親しみを込めて呼ばれている落合遥己くんは、家族と見に行った松明あかしについて「昔から伝わるものがずっと残ればいい」炎を見つめながら思ったことを語り出す。好きな授業は体育。友だちと鬼ごっこやサッカーをするのが楽しい。「好きな選手は？」と尋ねると「本田選手と宇佐美選手」と照れながらも答えてくれた。将来の夢はもちろん、サッカー選手！

本作品は、須賀川まちづくり推進協議会主催「第8回まちに夢を飾ろう」の優秀作品。まちで体験した事をテーマに1〜3年生の児童から応募され、選ばれた優秀作品6点のうちの1つ。地域交流館ポタンにて過去の作品と共に飾られている。

ITARU HIRAMA

## 想いはうねりとなって大きな力になる

平間 至さん（写真家、GAMA ROCK FES 主催者）

**須** 賀川の皆さんに触れて「ピュア」で「熱く」想いを持った人が沢山いるということに感動しました。震災を機に始まったGAMA ROCKは、市民のための有機的な動きであって、フェスの開催を目的にはしていません。震災で同じ境遇の別の場所や人々に少しでも良い影響を与えることが出来ればと常に思っています。また、メンバー4人が揃ってお客様の前で話すことは初めてで、客観的に振り返ることができたことも新鮮でした。



DOMINIQUE CORBY

## 五感からはじまる味覚を大切に

ドミニク・コルビ（フレンチ割烹 Dominique Corby）

**目** でみて、香りを感じ、音を聴き、触って、口に入れて味わう。五感で味わうことを大切にしてみてください。須賀川市内の農家の方々の畑を訪問して、情熱ある農家の方たちに感動しました。須賀川の食材は本当に素晴らしいし、その食材を食べられる市民のみなさんがうらやましい！ 良い食材があれば何でも美味しく食べることができますが、発想ひとつで新しいものに生まれ変わるものもたくさんあることを忘れないでください。



YU MIZUSHIRO

## あらゆる壁を、扉に変えていこう！

水代 優（グッドモーニングス株式会社代表取締役）

**み** なさんに大切にしてもらいたいなって思っていることは、わくわくすることに体力と時間を費やすことです。一生懸命になりすぎてしまうと、当たり前のことを忘れてしまいがちですが、自分自身が夢中になれないと、いい場は絶対に生まれません。楽しい方向に変えていけるのは自分の姿勢次第なのです。僕も負けることはたくさんありますが、続けていく限りブレイクする可能性があるんです。大切なのは、折れない心ですね。





◎会いたいひとに会いにゆく

第一回

## 原型師 酒井ゆうじさんの アトリエを訪ねて

酒井さんの作品が生み出される、アトリエの作業場。ここに一日中もって原型を作る。床に座り、目の高さに粘土を据え、丹念に削っていく。奥には、怪獣を作る上で参考になるという、ティラノサウルスの歯のレプリカも。アトリエ非公開

「なんてかっこいいんだらう」  
少年時代の感動を胸に秘めながら  
ファンのためにゴジラを作り続ける

世界にその名が知れ渡る模型原型師、酒井ゆうじさん。酒井さんの手から生み出された模型は「酒井ゆうじモデル」として販売され、ゴジラファン、模型ファンがこぞって買い求める逸品だ。熱烈なファンは国内のみならず海外にも多い。作品の大半を占めるのは、ゴジラだ。かつて須賀川にあった映画館「中央館」。10歳の頃、その中央館の大行列に並んで観た映画『三大怪獣 地球最大の決戦』に登場したゴジラに、酒井少年は衝撃を受けた。「こんなにカッコいい怪獣がいるんだ」って思ったのを覚えていますね。何度も観に行ったり、さらには映画館にスケッチブックを持って行き、ポスターの下に座って模写までして。映画のシーンを手元に置いておきたい、リアルなものが欲しいと思ったんです」  
東京の美大を卒業後は、郡山の広告代理店にデザイナーとして就職。会社員として働く中でガレージキット（組み立て式模型）

の存在を知った酒井さんは、自己流で原型を作り始める。その作品がコンテストで入賞し、原型師としてプロデビュー。これまで150個以上の原型を制作してきた酒井さんだが、作る時はどれも

原型と徹底的に向き合うと言う。  
「原型を作る時に一番時間をかけるのはフォルムです。たとえばゴジラなら、しっぽまで含めた全身のポーズをどうするか。それが決まったらあとはひたすら作る。作っている途中も、表現したいものが反映されているかを細かくチェックし最後に顔を仕上げます。一番難しい、でも一番楽しい箇所。納品のギリギリまでどこかしらいじっています」  
ヒダの1本にまでこだわるのは、映画のゴジラを忠実に再現したいから……だけではない。「自分が納得するものにこだわっています。それがゴジラファンが望むものだと思いますので。そうして出来上がった商品だから、開封する瞬間はいつもワクワクする。お客さんと同じ気持ちになるし、なにより子どもの頃に帰っていますよ（笑）」  
ゴジラ映画の特撮に携わり、ウルトラマンを生んだ円谷英二氏も須賀川出身。「奇跡のような偶然でとても光栄に思います」と語る。

「難しそうだと思ったとしても、仕事は可能な限り引き受けるのが私のポリシー。これ、実は円谷英二さんの言葉なんです。特撮映画を撮っている最中に次々と出てくる難題を、英二さんは断らなかつたそうなんです。『何とかなる』と全部引き受けた。いい言葉だなんて思いました。私のところに来るお話もすべて何かの縁。これからの連続で、ゴジラを作り続けていくんですけどね」

### 酒井ゆうじ

須賀川市生まれ。会社員勤務時代、1989年海洋堂アートプラ大賞入賞を期にプロの原型師になり1993年にガレージキットメーカー「酒井ゆうじ造型工房」を設立。ゴジラ映画では、造形スタッフの他ゴジラのデザインにも携わる経歴をもつ。



粘土を削るための道具、スパチュラは自分でさらに改良して使いやすくしている。実際に使うのは2本ほどしかないそう



©TOHO CO., LTD.



# すかがわの味

## 第一回 渡辺果樹園

宝石のように、大切に育てている果実



須賀川市内にある渡辺果樹園を2月の暖かな日に訪れると、4代目園主の渡辺喜則さんと佳子さん夫妻、先代夫妻、そして2匹の犬たちが笑顔で出迎えてくれた。この農園で育てているのは桃や幸水、豊水などの和梨、そして全国的に珍しい洋梨ル・レクチェ。育て方がとても難しいというル・レクチェを通じ、渡辺喜則さんに果物との向き合い方を伺った。

大学卒業後に本格的に農業の道に入った渡辺喜則さん。大学は経済学部だったため、農業書を読み理論で学んでいった。9つある畑を合わせると4.5ヘクタールという広さの渡辺果樹園。その中で様々な品種を栽培するだけに、最初は各品種のサイクル

ルについていくのだけで必死だった。農業の面白さがわかってきたのは10年たってからだと言う。

同じ洋梨のラ・フランスとくらべてル・レクチェの生産量は10分の1という、日本ではまだ珍しい品種。渡辺果樹園では30年前から生産を始め、直販のほか贈答用として百貨店などに卸している。

「新たな品種を作るとき、土壌を作り、木を育て、満足いく実ができるまでに10年かかります。さらにル・レクチェはほかの梨とくらべて病気に弱い。食べごろなのに腐ったりもする。10年かけて作ったものがお金にならないということで、このあたりの農園は次々とル・レクチェをや

めていきました。正直うちも何度もやめようと思った。でもお客さんの『また食べたい』という声に支えられて、がんばってこれたんですよね」ル・レクチェの栽培は冬から始まる。150本の木がバランスよく育つよう剪定をし、実をつけるための準備をする。枝に咲いた花から一輪だけを残し、人工授粉。同時に大豆かすや米ぬかなど天然のものだけを使った肥料も冬の間に作っておく。どれも機械ではできない作業だ。「どの梨農家でもやることは同じ、あとはどこまで突き詰めるか。僕らはお客さんに美味しいものを食べてほしいから、毎日観察をし、成長を

念入りにチェックします。僕が追い求める理想的なル・レクチェは、年に1個あるかないか。申し訳ないけどそれは僕が食べますよ(笑)。その味を求めて、これからも作り続ける。手作りの肥料もすぐ結果が出るわけではないけれど、10年後20年後のためにやっている。大事なものは継続することなんです」喜則さんがここまで果物に取り組める原動力は何なのだろう。「買ってくれた人、ギフトとして受け取った人、取引してくれる業者さん。すべての人との信頼関係で作っています。みんなが満足してくれることが僕らの喜びですね」



### 渡辺喜則さん

須賀川市生まれ。渡辺果樹園4代目。2000年に実家である渡辺果樹園に入り、農業の道へ。栽培から、品質・色味を何度もチェックする出荷まで、より美味しい果物を作ろうと日々奮闘している。

### 渡辺果樹園

須賀川市森宿安積田118  
☎ 0248-73-4174

昭和4年に創園。90年、4代続く果樹園。3代目の渡辺喜吉さんが洋梨ル・レクチェの栽培を始め、現在は、和梨4種類、桃3種類、ル・レクチェを中心に栽培、直販も行っている。



選者・DJ孔明 a.k.a EXTRIBESTERさん

### 『天国への階段』

レッド・ツェッペリン

学生時代はいわゆる不良。反抗ばかりしていた中学1年  
 のときイギリスのロックバンド、レッド・ツェッペリンの『天国への階段』を聴いて衝撃を受けた。1  
 曲の中にストーリーがあり、音楽の奥深さを初めて知った曲でした。  
 高校卒業後はイギリスに留学し、ダンスミュージックに目覚めてDJを始めたのもその頃。帰国後、実家でレッド・ツェッペリン『IV』のレコードを見つけました。『天国への階段』も入っている名盤で、親父が昔買ったものだった。親父はロックを聞かないと思って

いたのに、同じ音楽が好きだった。親父とはほとんど話さないけど、この曲でつながっているんだなとは思っています。  
 去年から、須賀川のイベントにも参加していて、手作り市『Rojima』ではリラックスミュージックをかけています。「機械とかよくわからないけどいいね」っておばちゃんが言ってくれたり、子どもたちが熱心に見てくれたり。先入観を持たずに音楽を楽しんでもらうのは、自分が目指してきたところ。DJをやっててよかったって思いますね。



DJ孔明 a.k.a EXTRIBESTERさん  
日本各地のイベントに出演するかたわら、プロジェクトFUKUSHIMA!内の音楽イベント「DANCE MUSIC FUKUSHIMA!」やインターネットストリーミングチャンネル「DOMMUNE FUKUSHIMA!」の運営にも携わっている。

# 音楽と

# 本とわたし

選者・須賀川市図書館 館長 飯田良子さん

### 『杉浦日向子の江戸塾 特別篇』

杉浦日向子 PHP研究所



飯田良子さん  
須賀川市図書館に司書として長く勤務し、2014年より第17代館長に就任。須賀川の郷土資料と、親子のための本の充実に力を注ぐ。

須賀川市図書館でずっと司書として勤務し、17代目の図書館長になって2年経ちました。開館100周年の年に館長であることに、不思議な縁を感じています。私自身、子どもの頃からこの図書館をよく利用していたひとり。たくさんのお思い出が詰まっています。  
 今私は、江戸時代の本に夢中です。あるテレビ番組で、杉浦日向子さんが楽しそうに江戸文化をお話していたのを見たのがきっかけでした。もともと捕物帳の小説を読んでいたこともあり、時代背景がよりわかるようにと、杉浦

さんの本を読むようになりました。どれも面白いのだけど、『杉浦日向子の江戸塾』はとて読みやすい。杉浦さんが9人の方と江戸について対談をされています。大変な時代だったけど当時の女性も現代と同じような生活をしていただけ。当時の日常が見事に感じられる。須賀川にも俳句を始め、江戸時代から続く文化があります。私ももっと当時の須賀川を知りたい。きっかけは些細なことだったけど、本で世界が広がったんです。この図書館も興味のきっかけになる場所であり続けたいですね。



\*現在品切れ・重版未定

すかがわ、めぐるめく 春号  
編集後記



出張中のある日の夕食は、市内にあるイタリアン「フェッラゴースト」のカウンターで。

東京から須賀川に通うようになって2年が経ちます。制作中の今3月はまだ寒く澄んだブルーグレーの空と山々が溶け合う光景はとてもきれい。出張の度に立ち寄りたい喫茶店やお店も増えました。食いしん坊の私たちは、美味しいものに出会えると、どんな人が、どんな思いで作っているのか知りたいと思います。それは一杯のコーヒーでも同じ。小さな出会いを繰り返しながら私たちは須賀川が大好きになり、いつの間にかそこには、会いたい人がいる街がありました。出来上がったこの冊子「すかがわ、めぐるめく」にはいくつもの出会いが記録されています。

(スティルウォーター)

会いたい人がいる街、須賀川

◎ 声のバレット／須賀川市市民交流センター  
プレスサイトについて  
開館するまでの期間、準備や計画に参加していただけの場の一つとして、須賀川市市民交流センターにまつわる情報を発信していきます。  
<http://sukagawaodeko.jp/>



◎ 本冊子タイトル「すかがわ、めぐるめく」について  
「めぐるめく」とは、ここでは「光景が極めて美しいさま」を意味する「めぐり」と「めぐらさる」という進行形を表す「めぐるめく」を合わせた造語。沢山のひとが行き交う須賀川市市民交流センターで、「ひと」や「もの」や「ものごと」が巡り、沢山のきらめく光景が生まれる場所になることを願って、このタイトルをつけました。

◎ 本冊子に描かれたイラスト  
「翠ヶ丘公園」(P.2)「牡丹の花」「きりぎりす祭」(P.15)は、ワークショップを通じて須賀川の好きなおとこをあげてもらった際に多くでてきた参加者の声からいただきました。

発行人：  
須賀川市市民交流センター整備室  
企画・編集・制作：  
株式会社 スティルウォーター  
アートディレクション・デザイン：  
畔柳仁昭 (株式会社 サザランド)  
表紙写真：村越としや (写真家)  
協力：  
株式会社 石本建築事務所  
畝森泰行建築設計事務所  
アカデミック・リソース・ガイド株式会社  
印刷・製本：株式会社 星総合印刷  
発行元：須賀川市



須賀川のデザインを探す①

CCGA 作品収蔵庫

グラフィックアートという価値

宇津峰山の麓に佇むここCCGAは設立20年のアートセンター。今回、作品収蔵庫を特別に見せてもらうことができました。重厚感のある銀色の扉を開けること2回、ようやく中に入ると、最初に目に飛び込んできたのは天井まで届くスライド式の版画作品収蔵棚でした。数多くのアーティストが制作したNYの版画工房「タイラーグラフィックス」の版画作品約1000点と、日本を代表するグラフィックデザイナーの田中一光らを含む国内外の貴重なポスター作品を、約1万5千点収蔵しています。最近力を入れていることのひとつは、2012年に施設内に作った小さな版画工房の活動です。「グラフィックアート」は、本来「版画」を意味するもの。須賀川は、江戸時代の銅版画で知られる画家、亜欧堂田善の出身地で、もともと版画に縁のある場所なのです。ワークショップは年に2～3講座を開催、1講座につき最大で4週連続の日程で行われ、熱心な参加者が多いそう。定期的に通うひとが増えてきているのは、緑ゆたかな環境が制作に向き合うのにぴったりだからでしょう。企画展のほかにも、こうした地域に根ざした取り組みが盛んで、版画教育の拠点として市民が積極的に活動できる場を目指しています。

写真左の作品はアメリカのポップアートの画家、ジェームス・ローゼンクイスト、右側の3枚はイギリスを代表する芸術家デイヴィット・ホックニーの作品。



CCGA現代グラフィックアートセンター  
須賀川市塩田宮田1  
☎ 0248-79-4811

DNP文化振興財団が銀座と京都のギャラリーと共に、文化継承を目的とし運営するグラフィックアート専門の美術館。収蔵作品も充実。施設内の版画工房は経験者向けのアトリエ開放も行っている。



グラフィックとミュージック展  
～2016年6月5日(日)

期間中ミュージアム・コンサートが開催される(5/22)。展示会場で生演奏を聴くことができ特別な時間が体験できる。要事前申込。



POINT OF VIEW

# 定点からの記録

写真・村越としや



須賀川市市民交流センター予定地。松明通り沿いにあるホテルウィングインターナショナル須賀川の屋上より撮影。

## 協働の証

文・畝森泰行

市民交流センターの建設工事が始まる。約2年にわたって土工事から始まり内装や家具に至るまで何百人もの職人がこの場所に訪れ仕事をするだろう。多くの人の手によって1つの建築をつくる建築創造の現場がまさしくこれから始まるのだ。

いつも自分自身に問いかけてきた。長く愛してもらう建物とは何か、そのためにいま何ができるか。何度も模型をつくり多くの言葉を交わすなかで見えてきた建築の姿、それは決して1人ではつくることのできない協働の形であり、人と人の交わり場だ。震災から5年が経ついま、様々な人と考えを巡らせ、思い育んだその証を次はこのまっさらな地面の上に共に描いていきたい。

### 畝森泰行（建築家）

1979年岡山県生まれ。横浜国立大学大学院修士課程修了。西沢大良建築設計事務所勤務後、2009年に独立し、畝森泰行建築設計事務所を設立。榊石本建築事務所と共に市民交流センターの設計を手掛ける。

### 村越としや（写真家）

1980年須賀川市田中生まれ。日本写真芸術専門学校卒業。2011年日本写真協会賞新人賞、2015年さがみはら写真新人奨励賞受賞。写真集『火の粉は風に舞い上がる』他多数。